愛別離苦

独生、ひとり生まれて来たわれわれは、独死、ひとり死んでゆかなくてはならない。その間にいかに多くの人に出会って、愛し睦み親しみあっても、皆別れて行かなくてはならない。人生の悲劇のほとんどが愛別離苦によって生まれる。

人は人に会う。そこに不思議な因縁を感ずる。「袖の振り合い他生の縁」、友人、隣人、親族、兄弟、親子、夫婦、師弟等、様々な関係において人に会う。互いに助け助けられて、愛し愛されて人生が成り立つ。

しかし人は会っただけで真に会っているであろうか。会っても会っても会っていない、そこに人生の根元的なさびしさがある。愛の世界のさびしさがある。凡夫は凡夫でさびしく、聖者は聖者でさびしいのではあるまいか。しかし凡夫はなれる。「神にも仏にも馴れては手ですべき事を足にてするぞ」(蓮師)。この馴れること、麻痺することによって、この愛のさびしさを忘れる。

けれども一度なれることによって平気になった凡夫も、愛別離苦に遭(あ)うや、忽ちさめて人生の根源的なさびしさにつれこまれる。そして今更に共に相会った因縁について考えるのである。わが子を餓鬼と叱った親も、わが子の死に会えば、これを祭壇に上げて拝む。そしてその心が過去に対して深い内省をおこさせる。かくして愛別離苦は人生を厳粛なものにする。

口伝抄にいわく「愛別離苦にあうて父母妻子の別離を悲しむとき『仏法を持(たも)ち念仏する機いふ甲斐なく歎き悲しむこと然るべからず』とて彼を恥ぢしめ諌むること多分先達めきたるともがら皆此の如し。この条、聖道の諸宗を行学する機のおもひならわはしにて、浄土真宗の機教を知らざるものなり。」と。真宗念仏の世界はそうではない。愛別離苦の悲しみを悲しみつつ、それゆえに本願を信じて念仏するのである。罪悪深重を知るのも、昿劫より已来の流転輪廻を感ずるのも、ただ独生独死独去独来の絶対孤独の運命を知るがゆえである。

世尊の入滅に悲泣した仏弟子たちは、無常の嵐の中にかえって仏身の常住を感得し、罪業深重に覚めて無限の大慈悲を知った。

地上の何ものによってもどうすることもできない悲しみ、その悲しみのみが、この世ならぬ浄土を、彼岸のものである南無阿弥陀仏を求めさせる。成功に得意になることができたり、人間の愛を真実と思うことができたりする人には、念仏は無用であろう。

しょせん人生は寂しい。それは人間の運命である。この人間の宿業をごまかすことなく受け取って念仏する時、このさびしさに光が与えられ、ほのかなる喜びが与えられ、別れても別れることなき倶会一処の領域を知らされるであろう。人生の寂しさは何ものによってもどうすることもできない。ただこれを内に転ずる者のみが大慈悲の摂取の中にあることを知るであろう。これのみが人間のたった一つの本当の在り方である。

孤独の内転

人はだれでも孤独である。自己の運命を思う時、孤独である。苦悩に出会う時、病む時、死を思う時、すべて孤独である。釈尊もこのさびしさの解決のために、聖人もこの運命の打開のために、道を求めて出られたのであった。前科何犯のならず者も、人の世の冷たさに泣いた日がある。一切の悪人もこの孤独の淋しさから生まれる。真実の目覚めはここから生まれる。

淋しさゆえに享楽を追い、外にこれをごまかす対象を求めて走れば、ただ流転がある。魂がしびれて楽天的になるとも遂には愚痴の二文字でこの世を終わるであろう。常に外に向かって求め、人を責め、世を憤り、自暴自棄に陥れば、天地人生何ものも、これに善意と温かさをもって対応してくれるものなく、身を破滅の闇に見出すであろう。

とどまれ！さびしいか、さびしさに徹せよ。ごまかすことなくさびしさを抱いて、真実の教えを聞け。それでもさびしければ、さらにさびしさに徹せよ。教えを聞きつつ。真実の教えは必ず、生死を、宿業を、背負いきらせて、これを内転せしめ、大悲摂取の光懐にその全我を託せしめるであろう。

地上の何ものかによって、おきかえることの出来る淋しさより、地上の何ものによっても癒すことの出来ぬ寂しさに徹する時、人ははじめて、無限なるもの、死なぬものの大慈悲の招喚を聞くであろう。

歎異抄にいわく『廻心といふことただ一度あるべし』と。この百八十度の転回を、孤独の内転という。

万人を抱く愛の行者はここから生まれる。この人は知らずして、光と温かさと力とを人に与うるがゆえに、聖人はこの人を常行大悲の人と讃えられる。大慈悲はこの人に於いて具体的である。しかし、かくあらしめたのは、全く教主善知識である。であるからその時、法然、親鸞両聖の如く、本願によって必然に結ばれたる人を発見して、長く孤独と別離して、孤独の独は、独立、独自、独一の独と変わるであろう。本願力によるがゆえに、世尊にあっては天上天下唯我独尊と言い、聖人にあっては南無阿弥陀仏と言う。行者誤って、唯我独尊を独慢と考えてはならない。自尊はそのまま尊他である。

かくして一切衆生の差別せる宿業個性をそのままに、大悲真実の中に摂取して、あるがままをあるがままに生かしきりたもうを、真宗念仏と言う。

生死の苦海

『生死の苦海ほとりなし』とは、龍樹和讃の一句である。

この人生は生死の海である。そして生死するがゆえに、横にも竪にも、はてしなく苦海である。いつでもどこでも苦海である。現象界は一面は助け合う共同体であり、一面は永遠の闘争であり、弱肉強食である。それゆえに一切衆生海は苦海である。

「宗教のいらない社会を造ればいいではないか！」

ラジオから景気のいい声が聞こえる。だが死を見つめて生きている者に、その声が何と聞こえるであろうか、それは一つのたわごとに過ぎない。宗教をいらないものにしようとならば、我より死を取り去って頂きたい。それだけが人間にとって不可能である。死が無くなれば人間ほとんどの問題は無くなるのではないか。

「死なんか問題にする者は、問題にならないあほうだ」。

いくら何と言われても、私には死が来る。そしてそれが私のすべての問題である。馬鹿でも、あほうでも致し方がない。何と言われても弁解のことばがない。この死の前にはすべてが『無』であることにさめたものに宗教がある。

『宗教のいらない社会をつくる』、そんな声は、熱い声、力強い声ではあるが、高上がりした人間の、およそ私には縁遠い、狂信の声としか受け取れない。死はしかし、私の問題であるだけでなく、万人の問題であるかも知れぬ。

如来真実の教法は、我を『無の死』から救い、無の自覚において、光と力と喜びを与えて生老病死を超えしめ、死の前にもゆるぎなき、大願の船に乗托せしめて、人生の価値を転換し、無限の苦悩に随順せしめつつ、宿業のすべてをそのままに生かし、法界自然の大道に直入せしめて、我をして任運無作の法楽楽に、寂静湛然、不可思議の喜びに安住せしめたもうではないか。

『生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば
　　弥陀弘誓のふねのみぞ　のせて必ずわたしける』

死の床にもなお、一貫の願を失わしめず、破滅なく、自暴自棄なく、呪詛なく、不平なく、不満なく、恐怖なく、不安なく、三毒煩悩は持ちながら障げられず、八万四千の妄念は起これども妨げられず、報恩謝徳の大行に永遠の今を安住せしめたもうではないか。

静かに正法によって苦に徹し、愚悪に徹して、無有出離之縁と合掌すれば、身は本願大悲真実の大船上にあるを知るであろう。

誤って小我の抜き手をきって大苦海に出でてはならない。生-死するものよ。

我等の世界

真宗念仏の世界は、竪(たて)に無限絶対なる如来の大悲本願によって、仏凡一体の関係にあると共に、横に同朋と信心のまことによって結ばれて、一つの美しい世界を出現するのである。

特に親鸞聖人は、弟子一人も持たずと宣言し、御同朋御同行と念仏の人を敬愛されたのである。はるばる命がけで常陸の国より京都まで、道を問い、法を求めて来た人たちに対してすら『詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し、このうへは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも面々の御はからひなり』と、自由の天地に人を解放して、信ずるところを強いつけず、威力をもって人を征服せず、教権をもって人を束縛せず、ただ、自ら信ずるところを行じて、その離合集散を因縁にまかせ、何人をも宗教の名において所有しようとせられなかった。

あまりにも美しく清浄ではないか。それは、如来浄土の清浄光に洗われ、真実智慧によって人間の我執自力、邪見憍慢が限りなく否定せられた、信心の智慧による和の成就である。我等の生活もまた、この聖人の生活の如く成就されねばならない。

我等は一人一人が信心決定して念仏することによって、平等なる信によりて自然に結ぼれていなければならない。『いかにたからものを仏前にもなげ、師匠にもほどこすとも、信心かげなばその詮なし。一紙半銭も仏法のかたにいれずとも、他力にこころをかけて信心ふかくば、それこそ願の本意にてさふらはめ。』(歎異抄)

利によって集まるものは利によって去り、名によって集まるものは名によって散る。

名利権勢を求めて集まらず、立身出世を求めて集まらず、主義によって徒党を組まず、不平愚痴をもって集まらず、善悪によって結ばれず、学歴によらず、男女老若によらず、規約によらず、かくして人間の発する何ものにもよらず、したがって人間のあらゆる心を持ち合わせつつ、ただ、自然にして、謀(はか)らわざるに、如来本願力廻向の大信心によって結ばれ、一味平等なる法味楽の調和によってのみ、我等の世界は成就されるのである。

我らの歩みは、法則がここにあった。それは一見まことになまぬるい、あまりにも悠長(ゆうちょう)な考え方のようである。しかもこの淡々として水の如き自然の結合こそ、一番美しく、また一番和の早道であることを我等の同朋は立証した。

念仏の同朋の集いは美しい。

我らは唯信の世界に一味平等である。善悪によって裁いてはならない。我慢を張って同朋の間に威勢を行じてはならない。謙譲の徳によって下座に居り、互いに助け合い、讃嘆し合い、尊敬し合い、互いに同行善知識となって、美しい華園を出現しなければならない。

我等の集いは、仏徳による人格的なものでなければならない。

泉

私の心ひかれるものの一つに泉がある。

泉に心ひかれるのは、それが自然であって、清らかで、夏は冷たく、冬は温かで、見るものをして、掬(すく)うものをして、快適ならしめるからであろう。

泉はいい、思い出しただけでも、清涼を感ずる。横にこの泉を掘り当て、家の裏の水槽に不断に、筧を通ってこの清涼な水の音がしている家、それも病床に思い出すものの一つである。深山幽谷の泉に至っては、ただ思い出すだけで、おのずから寂々の境に沈ましてくれる。

信は、浅間しい人間の心に湧いて下さる泉である。堅い我慢な心の石の間に、この信の泉がわき出て下さると、この清涼の心水は、いかなる心をも柔軟にして下さる力がある。

いかに人間が自分の行動の正しさを主張しても、それを見る人たちに不安と、恐怖と、嫌悪等の心だけを起こさす場合、そんな行動の行末からは決して人間の真の幸福は出て来ないであろう。何かが欠けている。美しいうるおいが欠けている。うるおいがないとは、心の真実が欠けていることである。また他人の真の心に通うことができないのである。

人は一面に於いては、富貴も之を淫(いん)すること能わず、威武もこれを屈すること能わず、何ものにも動かされない一面がなくてはならぬと共に、小さい真実の心の表われに対しても涙して感謝する一面がなくてはならぬ。それは両立するものである。うるおいのない心とは、自ら柔軟な真実の心を欠くのみならず、他の真心も受け入れない心である。こうした人が集まるところには、殺伐な砂漠の有様が出現する。

信心は、三毒の岩の谷間に湧き出ずる清水である。自然の泉である。自然の浄土よりおこって、現実の念仏行者の胸にわくこの泉は、自他をうるおし、自他を生かし、その煩悩業苦を洗い清めて、自然の浄土に帰る。

御念仏は、この泉の流れてかえる音である。

御本典行巻に云く『悲願は喩へば……猶(なお)し湧泉の如し。智慧の水を出して窮尽すること無きが故に』と。

信心の自然の清水は、如来願力そのままに湧き出でる、清浄真実の泉である。

光明

人は光明がなくては生きられぬ。であるから、人は何かに光明を認めて生きているのである。光とは何であるのか。君が光と言うのは何であるのか。その答え一つが君の価値を決定するであろう。

貧しい者には金こそ光である。何とか生きて行けるものにとっては、名利の満足こそ光である。病む者にとっては全快こそ光である。そして君にあっては何が一体光なのであろうか。

光を求める者は、自らが暗黒の中にいることを感ずるがゆえである。暗いから、光を求めるのである。甲は金の中にいるから安心を感じ光を感じている時、乙は金の中にいつつ不安を感じ闇を感ずるのである。であるから、暗(やみ)を感ずるということは、その人の精神生活の深さに比例するのである。

動乱そのものの人生にあって不安を感ぜず、悩みを感せず、苦しまずして生きてゆけることが、凡夫の悲哀である。悩まず、苦しまず、求めないがゆえに、真の光明が何であるかを知ることができない。悩みに打ち当たったものは幸せである。人生の暗黒が身にしみて感ぜられる人は幸せである。

人の世の光となった人たちは、皆、人の世の闇に泣いた人たちであった。普通の人が平気で通られた問題を平気で通れなかった人である。人生をいい加減にごまかして通れなかったのである。生とは何であるか、死とは何であるか、愛とは何であるか、道とは何であるか、人格とは何であるか、自覚とは何であるか、何一つとして解決がついてはいないではないか。

しかるに我等は、親鸞聖人の法流に遇(もうあ)うことが出来て、光明とは何であるか、無明の黒闇とは何であるか、自覚とは何であるか、人格とは何であるか、道とは何であるか、等々の問題を一つにして、生死の一大事、後生の一大事となし、これを信の一字において解決し、念仏一行として我らの上に廻施して下さった。

念仏したとて苦しみが無くなるのではない。念仏したとて悩みが少なくなるのではない。正しく真に苦しみが無くなるのではない。念仏したとて悩みが少なくなるのでほんとうの苦しみ方、ほんとうの悩み方のなされるところには、深い光がある。たとい人生を楽天化してゲラゲラ笑って過ごしても、それが至極浅薄なものであり、正しいものでないならば、その楽しみには深い闇が裏づけられている。

万世を照らすような光、万人をつつむような深い光、そうした不滅の光明を仰ぎたい。だれに知られなくてもいい、どんな苦悩の中でもいい。永遠の常住の光明を仰ぎたい。それが万人の心の底の願いではないか。

暗深きに驚くことなかれ。暗深ければ光明も深し。念仏道においていよいよ不滅常住の光明の無限なるを知ることである。